



# 三田国際学園中学校・高校

▶設立：1902年(戸板裁縫学校として) ▶種別：全日制／普通科／共学 ▶生徒数：1学年約200人  
 ▶2015年に共学化し、現在の校名に改称。「発想の自由人たれ」をモットーに、世界標準の教育をめざす。  
 ▶卒業生の進路状況 大学・短大…98%(うち約10%は海外大学)、専門学校・就職等…2%

## メタ認知、ストーリー化、言語化力を養う

本校の学びの大きな特徴が、“相互通行型授業”です。全授業で教員はまず“解のない問い”を投げかけ、生徒は個人やグループで仮説の構築、検証を経て、学内外での発表やレポート執筆に至ります。年内入試ではこうした探究活動で培った力が高く評価されるため、一般入試とは異なる可能性を開く手段として積極的に活用しています。

生徒は入学以来、学びの積み重ねで得た苦勞、気づき、成長などを、ポートフォリオに蓄積し続けます。それを棚卸しし、自己を振り返る大きな節目が高2の冬です。ポートフォリオを基に志望理由書を作成するのです。生徒は最初から主体的に進路を選ぶことができるわけではありません。志望理由書や面接、小論文などを形にする演習を重ねることによって、次第に自分の価値基準や将来に対する軸が明確になり、それを他人の共感を呼ぶような「ストーリー」として言語化できるようになります。

総合型選抜をはじめとした年内入試は、いわば、「あなたのストーリーは何ですか?」と大学から問われているようなもの。そこに正解はありません。よって本校で行われている年内入試「対策」は、実社会と繋がり行動の中で、自己理解と現在地の把握に努め、キャリアビジョンをストーリー化するための言語化力を養うこと。他者との関わりの中で紡がれる自分なりの「解」が大切なのであって、決して学校生活を受賞歴で固めることではありません。

## 生徒の発想や主体的行動を促すAPを望む

このような観点からすると望ましい年内入試とは、入学後に必要な教科の知識だけでなく、大学・学部が大切にしている資質やマインドを問う入試です。例えば小論文で、医療と直接関係ない哲学的なテーマを出題する医学部、絵画の鑑賞について問うスポーツ系学部などからは、どんな人を育てたいのかが伝わってきます。

その大本となるのがアドミッション・ポリシー(AP)です。必要な経験や考え方について読む側に解釈を委ねるAPのほうが、生徒は何をすべきか自分なりに解を出し、主体的に行動しやすくなります。一般的な表現やあまりに具体的すぎるAPは、かえって生徒の主体性や発想を妨げかねません。生徒にはAPを読み込めと指導していますが、中には読み込んだ結果、魅力半減する大学もあるようです。AP=大学や学部のストーリーとすると、大学にも言語化する力が問われているのだと思います。

年内入試は大学にとって、欲しい人材をダイレクトに採る入試です。理念さえあれば、もっと主観的な選抜方法でいい。皆さんが考える育成ストーリーを遠慮なくぶつけてもらえれば、生徒は全力で立ち向かうでしょう。

一方で大学とは、教育についてもっと対話をしたいですね。「ポートフォリオ」一つとっても、しばしばお互いの定義のずれを感じます。教育理念をオープンに話し合い、相思相愛の相手を見つけて育成をともにするところから、高大の絆が結ばれていくのではないのでしょうか。

お互いのストーリーを問う  
年内入試は「解のない入試」

目利きに聞く!



学習・進路指導部副部長  
城野大輔

### 年内入試の 進学実績(2019年)

国公立大／お茶の水女子大学、筑波大学など  
 私立大／早稲田大学、慶應義塾大学、上智大学、中央大学、明治大学、立教大学など

	中学校	高1	高2			高3		
年内入試 指導スケジュール (受験校の決定 ～受験対策)	中1 ポートフォリオ記録開始	5月 オリエンテーション(合宿 で将来の目標を検討)	7~8月 推薦入試シミュレーション オープンキャンパス レポート作成	9月(~3月) 小論文、志望理由書 講座(希望者)	12~1月 志望校向けの 志望理由書第1稿作成	3~4月 志望理由書提出(第2稿、 個別添削スタート)	4~7月 小論文講座(共通課題) 志望理由書個別添削	8~11月 小論文講座(ハイレベル) 志望理由書個別添削 推薦入試面接練習
年内入試 指導のポイント	▶中学校から始まるキャリア教育が起点。学びを蓄積したポートフォリオによって自己理解を促す ▶大学を「選ぶ側」に立てる入試として、年内入試を積極活用。ただし一般入試対策も並行させる ▶志望理由書や小論文の指導を重ね、キャリアをストーリー化するための言語能力を養う							
大学への期待	年内入試	▶自学のポリシーと一致した学生を採る、主観的な入試を ▶直接的な教科学力だけでなく、資質、マインドを問う選抜手法が望ましい						
	高大接続	▶「ポートフォリオ」「入試対策」などのキーワードについて、高大双方が考えを述べ合える場が欲しい ▶教育について相思相愛の学校同士が、教育プログラムを(単発ではなく)継続的に共催するのが理想						
情報提供	▶APをはじめとする「求める人材像」は、生徒に考えさせる余地を持たせたものを ▶どんな未来をつくらうとしているのか、大学・各学部が描く「ストーリー」を示してほしい							